

児童期の親の養育態度と青年期の自尊感情・対人不安傾向との関連

○桐生実稚恵・井森本修充

(広島国際大学大学院心理科学研究科実践臨床心理学専攻)

序論

親の養育態度は子どもの自己の確立に影響を与えると考えられている。例えば、両親による子どもの受容は、子どもの自尊心を高めるが(Coopersmith, 1967)、統制は青年期の対人回避を促進する(佐々木・小林, 2007)。また、親の期待・干渉は、子どもの自尊感情を高め、親の命令は対人不安傾向を高める(菅原・伊藤, 2013)。このように子どもの自己に影響を与える主な要因には、親による統制と受容の2因子があることが指摘されている(谷井・上地, 1994)。

しかしこれらの研究の問題として、調査対象となる子どもの年齢を考慮に入っていない点あげられる。一般に子どもは、客観的な情報を利用して自己評価できるようになる10歳以降に自己意識が大きく変わることが指摘されており(渡辺, 2016)、親による統制や受容的態度が10歳以前に行われたのか、それ以降の時期に行われたのかという点は、子どもの自己の確立に大きな影響を及ぼすと考えられる。

そのため本研究では、子どもの自己意識に変化が現れる以前の6～10歳時の親の養育態度に焦点をあて、そこで確立した自己意識が青年期の自尊感情・対人不安傾向にどの程度影響を及ぼしているかについて検討する。また、同性の親の養育態度が子どもの自己評価に強い影響を与えるという指摘(徳田, 1987)を考慮に入れ、親の養育態度を父親と母親に分けて調査分析を行う。

方法

・調査対象者：広島県内H大学の学生169名に持ち帰りの質問紙調査を行った。

・使用尺度：(1)基本属性：学年、年齢、性別、(2)自尊感情：Self-Esteem Scaleの邦訳版(山本ら, 1982)、(3)対人不安：対人不安意識尺度(林・小川, 1981)、(4)親の養育態度：養育態度尺度(鈴木ら, 1985)の受容、拒否、統制、放任の4因子を用いた。小学1年生から小学4年生までの時を思い出しながら、母親と父親それぞれの養育態度について回答してもらった。

結果と考察

有効回答数は164名(男性79名、女性85名)であった。母親・父親の養育態度尺度について最小二乗法・プロマックス回転で因子分析を行い、因子負荷量0.35以上を基準に母親・父親それぞれ4因子を抽出した。

その4因子を説明変数、自尊感情と対人不安傾向をそれぞれ目的変数とする重回帰分析(強制投入法)を、父親、母親それぞれの養育態度別に行ったところ、父親の養育態度と女性の自尊感情・対人不安傾向に有意な関連が見られた(表1)。

表1 青年期女性の自尊感情・対人不安傾向への影響要因(β)
目的変数

説明変数 (児童期の父親の養育態度)	自尊感情	対人不安傾向
F1(拒否的な統制)	-.364**	.424**
F2(仲良し)	-.087	.141
F3(放任)	.129	-.045
F4(受容的な統制)	.249	-.337*
重相関係数	.472**	.517**

* $p < .05$, ** $p < .01$

男性の自尊感情・対人不安傾向や、母親の養育態度と男性・女性それぞれの自尊感情・対人不安傾向については有意な関連は見られなかった。

一般に目に見える能力や成績を評価する傾向がある父親の、拒否的・受容的養育態度は、自己意識が外面的な児童期(渡辺, 2016)に強い影響を与え、青年期の自己意識に違いが表れている可能性が考えられる。しかし、先行研究とは違い父親-娘間でのみ影響が見られたことについては説明できない。今回の研究には、データ数や調査方法の問題もあり、今後のさらなる検討が必要である。

引用文献

Coopersmith, S. (1967) Freeman and Company. / 佐々木・小林 (2007) 人間発達科学部紀要 12, 179-187 / 菅原・伊藤(2006) 岩手大学教育学部研究年報, 65, 31-44 / 谷井・上地 (1994) 教育心理学的研究, 42, 185-192 / 徳田 (1987) 心理学的研究, 58, 8-13